

●個別学習

■児童生徒実践型

実践タイトル タブレットPCで作業内容と出来高を管理

本時のねらい

作業学習において、集中力を保つのが難しく、気持ちが周囲に影響されやすい生徒に、いかにして一定時間の活動に集中させるかという観点からICTの活用を考えた。タブレットPCと作業内容、時間、出来高を管理するアプリを用いて生徒自身が操作し、自分の作業内容を自己管理させることで活動の見通しを立て、より意欲的に参加できるようにする。

主に活用したICT機器・教材・コンテンツ等とそのねらい

タブレットPC

対象生徒が自分の作業の状況を把握し、自己管理するためのツールとしてタブレットPCを利用させる。生徒はタブレットPCを作業場所まで持って行き、アプリを起動して作業内容を確認するとともに、活動の流れに沿って時間を意識しながら出来高を記録する。自分で操作することで自己管理の意識を高め、活動への集中を促すようにした。

PC教材

作業学習用アプリケーション「ワークWatch for iPad」(©KUNIKEN SYSTEM Co.,Ltd)はその日に行う作業内容を表示し、作業ごとに時間と出来高を計算できるようになっている。作業中は残り時間を意識しながら、原木一本を運ぶごとに画面にタッチして出来高を計上するように操作し、自分の行っている作業の状況と見通しについて常に確認しながら進められるようにした。

参考にしてほしいポイント

タブレットPCは画面をタッチすることで直感的に操作することができるため、知的障がいのある生徒にとっても比較的親しみやすく、楽しみながらICT機器の操作が体験できる。対象生徒は小学1～2年生程度の漢字を読み書きし、言語によるコミュニケーションがある程度可能であるため、画面の文字を読み取り、操作方法についても容易に覚えることができた。サイズの持ち運びやすく、識字しやすい画面の大きさを併せ持ち、個別に抽出して支援する際のツールとしても扱いやすい。利用できるアプリも近年教育向けに充実を見せており、見せる、提示するという役割に加えて、生徒が自分で操作して学習に取り組むといったスタイルでの活用が期待される。

| 学習の流れ(分) | | 主な学習活動と内容 | ICT機器・教材、コンテンツ等 |
|----------|---------------|--|------------------------|
| 本時の展開 | 導入 0 15 | ○作業前の打ち合わせ ・前時の振り返り ・本時の内容の説明、目標設定 | ・タブレットPC ・デジタルテレビ |
| | 展開 195 | ○作業活動 ・教師の指示を受けて、活動の準備を行う ・ホダ場より、しいたけの原木を移動する ・タブレットPCにタッチして出来高を記録する(写真2) | ・タブレットPC ・PC教材(写真1) |
| | まとめ 225 | ○反省会 ・本時の振り返り(写真3) ・作業日誌を記入し、今日の反省について発表する ・次回の説明を聞く | ・タブレットPC ・デジタルテレビ |



写真1: 作業実行中 作業内容、時間、出来高を表示



写真2: 原木一本を運ぶごとに「できた」をタッチする



写真3: 反省会にて作業の様子を動画で振り返り

児童生徒の反応

対象生徒はタブレットPCをとて気に入ったようで、タッチで画面が変化するように驚きの声を上げながらすぐに操作を覚えることができた。原木を一本運ぶごとにタッチして出来高を計算するという手順を理解すると、原木を渡した後は手袋をはずして画面にタッチし、また元の作業に戻るという流れが教師から言われなくても自然にできていた。休憩時間はタブレットPCを手放さず、作業のログを確認して誇らしげに教師や友だちと話す場面が見られた。

活用効果

| | |
|-------|---|
| 評価の観点 | 公民への関心・意欲・態度・数学的な見方や考え方 |
| 具体的容容 | タブレットPCの活用によって作業への集中が増し、周囲の生徒や教師に話しかけて活動が停滞する場面は見られなくなってきた。また、休憩時間に作業のログを確認しながら時間内に何本原木が運べたか教師と話し合う中で、よりたくさん運ぶためにはどうしたらよいかなど、作業に対する前向きな意欲も見られるようになってきた。 |

実践の手応え

作業学習の場面には普段登場する機会のない機器だけに、生徒の反応は上々であり、少しの活用ですぐに効果が表れる結果となった。特別支援学校で学ぶ生徒にとって「働く」という観点で見た場合、あいさつやコミュニケーションといった態度面、さらに時間内に指示された仕事を正確にこなすという知識面をしっかり身に付けることが重要である。障がいのある生徒たちが作業学習の中で「働く」ために必要な知識を身に付ける上で有効な支援ツールの一つとして本時のようなタブレットPCの活用が浸透していくことが期待される。